

組織キャンプへの継続参加者における 組織キャンプの果たした心理発達の機能について Studies of how organized camp affected the continued participants' psychological development.

伊東史エ

東京女子医科大学附属女性生涯センター

Fumie Ito

Institute of Women's Health, Tokyo Women's Medical University

要 約

本研究は、繰り返しキャンプに参加する子どもに注目し、その子どもたちが感じていたキャンプの機能を、臨床心理学の観点から探索的に探った。リサーチ・クエスチョン「キャンプ継続参加者は過去のキャンプ参加体験をどう捉え、自己の心理的発達にどのような機能、役割を果たしていたとけとっているのか」を基に、グラウンデッドセオリー・アプローチのStrauss法を用いて調査、分析を行なった。その結果、【自己効力感の獲得】【責任感・自立心の芽生え】【集団活動への適応】【内発的動機付けの発生】【数多くの新たな出会い・人間関係訓練】【社会的学習】【役割取得】【困難への挑戦欲求の充足】【創造性の開発】【所属及び受容欲求の充足】【自然への興味・関心の広がり】、以上の11カテゴリーが抽出された。

【Key Word】組織キャンプ グラウンデッドセオリー・アプローチ 質的研究 心理発達の機能

I 問題と目的

1. 問題

第19回日本学術会議にて公表された報告書「子どものころを考える—わが国の健全な発展のために—」(子どものころ特別委員会)では、現代の子どもたちを取り巻く諸問題が取り上げられ、それに対する改善策および提言等が提案されている。この諸問題の中のひとつとして日常生活の中で子どもの体験学習の減少について挙げられている。その解決策として、学校・家庭・地域社会が協力し、子どもたちにできるだけ自然体験や、具体的な実体験をさせるべ

きである、と述べられ、その具体案のひとつとしてキャンプが挙げられている。また、国からも“文部科学省における奉仕活動・体験活動の推進に関する施策”の中で“「子どもゆめ基金」事業”および“青少年の自立支援事業”という、民間団体が行う子どもの体験活動や、青少年の自然体験活動等への金銭的援助が行われている。

このようにキャンプはその有効性が評価され、子どもたちへの援助のひとつとして期待されている。しかし一方で、一般的にはまだ「キャンプ＝レジャー＝あそび＝単なる息抜き、閑つぶしほどにしか考えられ

ておらず、たかが遊びと軽視されている現状がある」という(森井, 1995)。

そこで本研究では、キャンプに実際には具体的にどのような効果があり、現実的に子どもへの有効な援助として考えられるのかについて検討したい。

キャンプについて行なわれた先行研究をみてもみると、キャンプ参加前と後の参加者の内面的変化の検討はこれまでいくつか行われている。「自律・自発性の増加」(中村, 1997), 「リーダーシップ行動の増加」「対人行動の向上および諸活動に対する建設的, 積極的参加の向上」(ともに, 倉本, 1981), 「自信と自己受容の向上」(渡邊・飯田, 2005), 「自己概念の向上」(飯田・井村・影山, 1988, 関根・飯田, 1996, 奥山・諫山・加藤, 2001), 「怒りの減少」(西田・橋本・徳永・柳, 2003), 「有能感および他者受容感の向上」(蓬田・飯田・井村・関・岡村, 2003), 「友だちづきあいの深まり」(松永・飯田・井村・関・落合, 1999)などである。上記の論文はいずれも質問紙法を用い、あらかじめ設定された側面的変化をみるものである。

一方、橘・川村・星野(1984)は、キャンプ参加者の自由記述によるキャンプ感想文を基に、因子分析法を用いて参加者側の視点からキャンプの効果を類型化した。

これらの先行研究は、多くが単回のキャンプ参加の事前と事後の変化を測定、調査したものである。また、学問的な背景も体育学、レクリエーション学、教育学が多く、臨床心理の観点から調査、分析されたものはほとんどないのが現状である。

2. 目的

1) 研究目的

先行研究によって、単回のキャンプ参加でこのような効果があると報告されているが、何年もの間キャンプに継続して参加し続ける子どもたちもいる。小学校から中学、高校へとまわりの環境が変化していき、部活動などで忙しくなっているにも関わらず、毎年キャンプに参加し続けるのには何かそれ相応の動機付けがあると考えられる。参加者のキャンプ参加への動機、つまりはキャンプには彼らが求めたなんらかの機能が存在し、それらが参加者の心理的側面に影響を及ぼしていると推測される。

以上のことを踏まえて、本研究では、キャンプが参加者にとってどのような機能・役割を果たしていたのかを検討する。児童にどのような変化が起きたのかという客観的事実ではなく、キャンプ参加者である児童が、自らのキャンプ参加体験をどう捉え、どのように感じたのかを分析、検討することを目的とする。それにより、従来のキャンプスタッフもしくは調査者によって設定されてきた項目以外の、参加者の視点からの新たな項目が抽出されることが期待できる。

2) 研究法の選択

本研究では、キャンプの元参加者がキャンプをどのように受け止め、どのように捉えているのか、を扱う。そのためこれまでの先行研究で多く行われてきた量的研究ではなく、質的研究を行うこととした。リサーチ・クエスチョンは、「キャンプ継続参加者は過去のキャンプ参加体験をどう捉え、自己の心理的発達にどのような機能、役割を果たしていたとうけとっているのか」と設定し、分析には、グラウンデッドセオリー・アプローチのStrauss法を使用

する。

Ⅲ 方法

1. 対象

本研究では、『Xキャンプ』という組織キャンプを対象に調査を実施する。

『Xキャンプ』は、1982年に発足した、民間団体を主体とする組織キャンプである。このキャンプの主な目的は「全人教育」を基盤に、非日常的な異年齢体験を通してよりよい人間関係の結びかたを学ぶ、プログラムを通して新しい自分に気付く、の2点である。

毎年8月下旬に5泊6日の日程で行われ、施設泊のスタイルをとる。キャンプにはスタッフのほか、トレーニングを受けた大学生がリーダーとして参加し、子ども達と寝食を共にする。キャンプ参加児(以後キャンパー)とリーダーの比率はおおむね3：1である。

キャンパーは普通学級に通う小学校1年生から高校3年生。Y県Z市の市報などを介して募集される。毎年参加者100名前後で実施される。

小学校1年生から3年生までを低学年ユニット、小学校4年生から6年生までを高学年ユニット、中学生と高校生を中高ユニット、と全体を3つのユニットに分ける。3つのユニットにはそれぞれユニットディレクターと呼ばれる責任者がおり、同じ施設で生活をするが、昼間は別々のプログラムを行う。

キャンパーはユニット内で性別ごとに5～6人でグループに分けられる。その際、同じ学校に通うキャンパーや、以前同じグループになったキャンパー同士が含まれな

いよう考慮される。

このキャンプでのプログラムは時間に余裕を持って組まれている。ゆっくりとした時間や、自由時間内でのグループ交流にもっとも重きが置かれている。そのため、食事もプログラムとして目的を持って行われる野外炊事以外は、施設の専門スタッフによって提供される。

研究参加者候補の対象となったのは、小学校、中学校、高校を通じて『Xキャンプ』に7～10回参加した経験を持つ、元キャンパーである。なお、筆者は当該キャンプに2001年から高学年ユニットのリーダーとして関わっている。そこで、公平なデータの収集のために、研究者である筆者とリーダー／キャンパー関係にあった人物に調査を行うことを避け、2000年までに『Xキャンプ』の高学年ユニットを卒業し、筆者と直接キャンプで関わりを持ったことのない元キャンパーを対象を限定した。

2. 調査手続き

2006年5月、研究参加者の条件に該当する16名へ「インタビュー協力依頼書」と返信用封筒を送付した。その結果、10名から返信があり、うち7名がインタビューを承諾してくれた。

質問項目の妥当性を確認するため、インタビュー了承の得られた7名の研究参加者からひとりを選び、予備調査を実施した。予備調査面接終了後、研究参加者に今回のインタビューの感想と意見を求め、本調査における半構造化面接の質問項目を確定した。なお、予備調査で実施した面接においても本研究の目的であるキャンプの機能および役割について十分語られていると判断し、この予備調査の結果も本調査の結

果と合わせて分析を行うこととした。

2006年7月から9月にかけて、本調査を実施した。調査を実施したのは男性2名、女性1名であった。年齢は19歳から24歳、学生2名と社会人2名である。初回参加は小学校2年生または3年生時で、参加回数は7～10回、『Xキャンプ』を卒業してから3～7年経過している。

調査了承を得られた7名のうちの残り3名は、連絡が取れなくなるなどの理由で、具体的な調査日時設定までには至ることができず、調査を断念した。

予備調査と合わせて、以上4名の半構造化面接のデータを、グラウンデッドセオリー・アプローチを用いて分析した。

Ⅲ 結果

グラウンデッドセオリー・アプローチを用いて4名の半構造化面接データを分析した結果、ラベル<上級生になった喜び・効力感><一人前として認められた体験><成長の自覚>から【自己効力感の獲得】カテゴリー、<責任感の芽生え><自立心の芽生え>から【責任感・自立心の芽生え】カテゴリー、<慣れない共同生活><仲間との同調><共同体験のよろこび><協調性の強まり>から【集団活動への適応】カテゴリー、<好奇心の広がり><自発的・積極的なプログラム参加><新たな体験への欲求><積極性の一般化>から【内発的動機付けの発生】カテゴリー、<新たな出会い><模索>から【数多くの新たな出会い・人間関係訓練】カテゴリー、<年長者への興味><年長者への尊敬><年長者の観察><年長者への同一視>から【モデリング】カテゴリー、<被叱責体験><これまでの

対処方法><年長者からの助言><これまでの対処方法の見直し><新たな対処方法の獲得>から【直接学習】カテゴリー、さらに【モデリング】カテゴリーと【直接学習】カテゴリーをサブカテゴリーとする【社会的学習】カテゴリー、<先輩の消失><役割の模索><先輩役割の引継ぎ><リーダー役割の請負><年齢ごとのすみわけ><異年齢との交流><他人への洞察><他人への配慮><他人の視点に立っての思考><愛他的思考・行動>から【役割取得】カテゴリー、<困難な体験><困難への挑戦><困難を乗り越えた充実感・達成感>から【困難への挑戦欲求の充足】カテゴリー、<遊びの創造><新たな楽しみ方の開発><創造的プログラムへの強い関心><プログラムの創造><プログラム創造の魅力><プログラム決定に携わっているという認識><キャンプを創造する意識>から【創造性の開発】カテゴリー、<友人獲得の場><友人・スタッフへの信頼感、安心感><ありのまま居られる場所><キャンプへの強い愛着>から【所属及び受容欲求の充足】カテゴリー、<自然体験><自然への興味>の芽生え>から【自然への興味・関心の広がり】カテゴリー、以上の11カテゴリーが生成された。(表1)

心理的発達に果たした機能・役割と考えられる各カテゴリーと、そのカテゴリーを構成する内容の概要を表2に示す。

Ⅳ 考察

1. 先行研究との比較

本研究と最も近い研究を行った先行研究として、橘・川村・星野(1984)の体育学の視点による研究が挙げられる。橘らは、女

子大学のキャンプ実習として行われた3泊4日の組織キャンプにて調査を実施している。参加者の参加回数についての明記はないが、授業の一環であることから1回と推測される。女子大学の授業であるから、調査対象者は女性に限定されたと思われる。

調査方法は、参加者に「キャンプ前の私とキャンプ後の私」という感想文を書いてもらい、これらの中から、キャンプ中に感じたこと、キャンプ後こころに残ること、について記述された文を拾い上げる。拾い上げられた文を取捨選択し84項目にしぼり、この84項目からなる質問紙を作成。この質問紙を別の年のキャンプ参加者に回答してもらい、その結果を因子分析している。この方法により、参加者側の視点からキャンプの効果因子を抽出した。この研究の結果、キャンプの効果として「親和・協調性」「邂逅」「自律・自発性」「自己拡大」「自然認識」「自己客観視」「野外生活」の7つの因子が抽出されている。

橘ら(1984)の研究で抽出された因子と、本研究で抽出されたカテゴリーを比較してみると、橘らの「親和・協調性」因子は、本研究【集団活動への適応】に近いと考えられる。項目をみても、本研究での【責任感・自立心の芽生え】もこの項目に含まれているようである。

「邂逅」因子は、「心を開ける友人が増えた」という項目においては【所属及び受容欲求の充足】に近いと考えられる。

「自律・自発性」因子では、「失敗をおそれなくなった」から【自己効力感の獲得】、「自分から進んで行動するようになった」から【内発的動機付けの発生】、「力一杯働いたあとの充実感を知った」から【困難への挑戦

欲求の充足】のなかのラベル「困難を乗り越えた充実感・達成感」に近い概念なのではないかと予測できる。

「自己拡大」因子では、「他人に頼りすぎていたことに気がついた」が【責任感・自立心の芽生え】に近いと考えられるが、そのほかの項目に該当するカテゴリーは見受けられない。

「自然認識」因子はそのまま【自然への興味・関心の広がり】と一致すると考えられるだろう。

「自己客観視」因子は、自己を他者の目で見える能力を得た、という内容のため、【役割取得】と類似した概念であろう。

本研究で抽出されたカテゴリーのうち、【数多くの新たな出会い・人間関係訓練】【社会的学習】とその下位カテゴリー【モデリング】【直接学習】、【創造性の開発】に相当する概念は橘らの因子には見られなかった。よってこのカテゴリーが示す概念は、今回の研究によって明らかとなった新出の概念といえるだろう。

この比較結果を軸に、以下に本研究で抽出されたカテゴリーごとの考察を行う。

2. カテゴリーごとの考察

(1)【自己効力感の獲得】カテゴリー

ラベル「一人前として認められた体験」「成長の自覚」「上級生になった喜び・効力感」から、【自己効力感の獲得】カテゴリーが生成された。

「一人前として認められた体験」では、「学年に関係なく、平等に扱ってくれた」といった内容が語られていた。スタッフ・リーダー・キャンパーから年齢の別なく対応され、一緒に遊んだり、叱責を受けたりした経験が、彼らの「自分も一人前なんだ」とい

う効力感につながったのではないか。「なんか小学校中学校って、ひとつのさ、学校にいるとひとつの差がすごい大きく感じて、先輩後輩みたいな。そういうのがキャンプにはなくて。」(発言者-逐語データ No: A-14)と語られていたことから、学校では上級生、下級生と自分の望むような関係を築くことが難しく、その分キャンプという場所でそれを実現することができた、というよろこびがあるとも考えられる。

<成長の自覚>では、主に精神的な成長について語られていた。自分が他者との関係をうまく築くことができるようになった、という実感が、精神的に成長できたという効力感につながったのではないか。

<上級生になった喜び・効力感>では、下級生ではできないような、上級生になったからこその体験をしたいという欲求と、自分もこのキャンプの中で昔見ていた先輩たちと同じポジションまで来ることができた、という効力感が語られている。これは、ひとつのキャンプに何年も参加したキャンパー独特の感覚と捉えることができる。『Xキャンプ』では、成長とともにユニットが上がり、ユニットごとに異なったプログラムを実施する。この特徴により、自己の立つポジションの変化を、より実感しやすかったとも考えられる。

これまで行われてきたキャンプ体験と自己効力感の関連についての研究では、平田・叶(1997)がキャンプ前後の一般性自己効力感を測定し、キャンプ後にこれが高まったとしている。一般性自己効力感が高まった理由としては、「それだけ効果のある、インパクトの強いプログラムであったことを示していることになる」と述べるに

とどまり、具体的な要因や条件等の特定には至っていない。一方で関根・飯田(1996)の研究では、キャンプ前後で一般性自己効力感の変化はみられなかったとある。関根らの研究では一般性自己効力感の向上がみられなかった原因について特定できなかったと述べられている。

【自己効力感の獲得】カテゴリーを構成するラベルおよび逐語データの分析から、継続参加者はキャンプ参加により異年齢集団の中でも1人の人間として平等に対応される経験をし、自分は一人前だ、という自己効力感を獲得する機会となった。加えて、キャンプ参加経験を通して自己の成長を自覚でき、自己効力感の促進につながった、という自己効力感獲得過程の1モデルを発見した。

このモデルについて述べるならば、キャンパーが自己効力感を獲得するための援助となるであろう条件として、異年齢との集団生活、一人ひとりを重要な個人として認知し平等に接する年長者の存在が挙げられる。加えて、キャンパー自身が自己の成長を自覚することで自己効力感のさらなる高まりが促進されると考えられるため、リーダーやスタッフはキャンパーの変化に気を配り、ポジティブなフィードバックを積極的に与え、キャンパー自身に効力感を意識させる機会をつくることも重要であると考えられる。

(2)【責任感・自立心の芽生え】カテゴリー

ラベル<責任感の芽生え><自立心の芽生え>から【責任感・自立心の芽生え】カテゴリーが生成された。

【責任感・自立心の芽生え】は後述する【役割取得】によって他者視点を獲得し、集団

の中での自己の役割期待を認識することによって獲得されるものだと考えられる。そのため、この2つの概念は強い関連をもっていると予測できる。

【責任感・自立心の芽生え】カテゴリーを構成するラベルおよび逐語データの分析から、キャンプでのグループ活動体験を通じ、自分がグループをまとめるという責任感や、リーダーに頼らない自立心が養われたと考えられる。そして【責任感・自立心の芽生え】には【役割取得】が重要なポイントとなり、強い関連を持っていると推測する。

(3)【集団活動への適応】カテゴリー

ラベル<慣れない共同生活><共同体験のよるこび><仲間との同調><協調性の強まり>から【集団活動への適応】カテゴリーが生成された。

<慣れない共同生活>では、衣食住を家族以外の人間と過ごすという体験から受けた刺激について語られている。今回の研究参加者はいずれも小学校2年生もしくは3年生から『Xキャンプ』に参加している。「生活……う～ん、でも今まで本当に家と学校と学童の生活だったから、だからキャンプ自体が異世界というか、すべてが初めてで、あんな集団でご飯食べるとかもなかったし。」(A-31)とあるように、集団生活の経験がそれまでほとんどない状態での初参加であったことが伺える。

<共同体験のよるこび>では、「みんなで歌ったり踊ったり、それこそスタンプ考えたりとか、そういう経験が1年に1回しかないわけだ。だから『また行きたい』と思って」(B-73)のように、みんなで一緒に歌をうたったり、踊ったりした経験が楽しかつ

たという内容が語られている。

<仲間との同調>では、「(屋外でトイレってイヤじゃなかった？女の子たち)その一緒に行ってた子たちがけっこう大丈夫な子たちで、多分、イヤだったかもしれないけどでも普通に一緒にいたから。そうそう、まわりがしてるから自分もできるみたいな。まわりが『いやだいやだ』っていう子たちだったら多分自分も別にイヤじゃないけどまわりがイヤって言うてるからしない、みたいな感じだったと思うけど、一緒に行っているキャンパーたちが『ちょっと行ってくるわ』みたいな感じのノリだったのね。だから『あ、じゃあ一緒に行くよ、見張ってるよ』とか、そういう感じのノリだったから、全然平気だったの。」(B-63)にみられるように、判断の基準が仲間準拠している。これは児童期特有のギャングエイジの特徴と思われる。

<協調性の強まり>では、自分が仲間集団に所属するという以外に、仲間集団にうまく馴染めていない他者に対して、仲間に入ることを勧めている。そのために、どうやって誘えば仲間に入りやすいか、どのような声かけをしたらよいかと思案している様子が語られた。この行為は、仲間集団を形成しそこに所属する能力以外に、仲間集団に所属できていない他者の孤独感、孤立感に配慮し、仲間関係に入ることを推奨している。これは、第19回日本学術会議報告書「子どものころを考える—わが国の健全な発展のために—」(子どものころ特別委員会)で不登校児に対する援助の一案としてキャンプへの参加が論じられている章の「孤独な生活よりも集団生活の楽しさを体験させる」という狙いが、具現化し

ていると捉えることもできる。

【集団活動への適応】カテゴリーを構成するラベルおよび逐語データの分析から、キャンプ経験は参加者にとって、日常とは異なる集団生活を送ることにより、仲間と一緒に過ごす楽しみ、一緒に何かにとりくむ喜びを知るきっかけとなった。その結果、仲間集団が形成され、協調性が強まり、集団活動への適応が促進されたというひとつのモデルを発見した。

(4)【内発的動機付けの発生】カテゴリー

ラベル<好奇心の広がり><自発的・積極的なプログラム参加><新たな体験への欲求><積極性の一般化>から【内発的動機付けの発生】カテゴリーが生成された。

<好奇心の広がり>では、キャンプで新たに体験したものごとに対して興味を抱き、それまではあまり注目しなかったジャンルへの好奇心が増した、という内容が語られていた。

<自発的・積極的なプログラム参加>では、指示を受けての参加ではなく、自ら楽しさを味わうためにプログラム参加をしたり、メンバーと行動をとともにした、という内容が語られていた。

<新たな体験への欲求>では、いままでに体験したことのないような新しい体験を求める意欲が語られていた。

<積極性の一般化>では、キャンプ体験によって得られた積極性が、そのほかの場面でも発揮されたという自覚が語られていた。

外部からの刺激によって誘発される意欲ではなく、自らの興味・関心や好奇心の充足のために学ぶ、あるいはものごとに積極的にとりくむ概念である内発的動機付け

は、中央教育審議会の提起した「生きる力」の中でも重要視されている。

【内発的動機付けの発生】カテゴリーを構成するラベルおよび逐語データの分析から、参加者はキャンプ体験を通じて日常生活では体験しないような目新しい出来事を経験し、より面白い体験をしてみたい、より楽しさを追求したいという意欲、内発的動機付けが高まり、それにより、さまざまな活動に対しての積極性が促進された、という1モデルを発見した。

(5)【数多くの新たな出会い・人間関係訓練】カテゴリー

ラベル<新たな出会い><模索>から【数多くの新たな出会い・人間関係訓練】カテゴリーが生成された。

<新たな出会い>では、いままであまり触れたことのないような大学生や大人に出会ったということが語られていた。学童期の多く子どもたちにとって、人間関係の広がりや家族、学校の範囲に限定されている。そのため、自分とは別の学校の生徒に出会うことや、きょうだい・親戚・先生以外の青年もしくは大人と出会うこと自体が、大きな刺激となったと推察できる。

<模索>では、新たに出会った人物に対して、この人はどこまで許してくれる人だろう、と規律・規範の境界線の模索を行っていたことが語られている。模索行動によって境界線の確認を行い、それを考慮に入れながら関係性を築いていた。

【数多くの新たな出会い・人間関係訓練】カテゴリーを構成するラベルおよび逐語データの分析を行った結果、キャンプ参加者は日常生活の中ではあまり頻繁に体験しない新規の出会いを、キャンプで多く経験

していた。その出会いの場面では、相手のことを探り、接し方や関係性の築き方を模索するという行動が発生していた。すなわち、キャンプ体験が、新規の人間関係構築の訓練の場として機能していたのではないかと、というひとつの仮説を発見した。

(6)【社会的学習】カテゴリー

ラベル<年長者への興味><年長者への尊敬><年長者の観察><年長者への同一視>から【モデリング】カテゴリーが生成された。

<年長者への興味>では、リーダーやスタッフに対しての肯定的な興味・関心が語られていた。

<年長者への尊敬>では、リーダーはすごい、というような漠然とした憧れの感情が語られていた。年長者を尊敬する要因となった具体的エピソード等は語られていなかったが、キャンプという場で出会った上級生、リーダー、スタッフに対して尊敬や憧れを抱いていたことが伺える。

<年長者の観察>では、肯定的な興味、尊敬の念を抱く年長者をもっと知りたい、と観察している様子が語られていた。

<年長者への同一視>では、肯定的な興味、尊敬の念を抱く年長者のようになりたい、と年長者を同一視の対象としている様子が語られていた。憧れの先輩と同じようになりたい、という願望が伺える。

キャンプでの異年齢との交流体験により、参加者が同一視の対象となるモデルを獲得し、モデルの特徴や言動を取り込んで獲得する、というモデリングの一連の流れをたどっていることが分かる。

ラベル<被叱責体験><これまでの対処方法><年長者からの助言><これまでの

対処方法の見直し><新たな対処方法の獲得>からは【直接学習】カテゴリーが生成された。

<被叱責体験>では、リーダーやスタッフから叱責を受けたときのエピソードが多く語られている。

<これまでの対処方法>では、研究参加者の捉える自分の過去の対処方法が語られている。主に、被叱責場面での対処方法が語られていた。

<年長者からの助言>では、年長者から直接「こういうふうにしようよ」という内容のメッセージを受けた、という語りがあった。

<これまでの対処方法の見直し>では、<被叱責体験>と<年長者からの助言>を受けて、自己のとった行動について振り返り、これではダメなのかもしれない、と見直しをする動きが語られている。

<新たな対処方法の獲得>では、<被叱責体験><年長者からの助言>を受けて<これまでの対処方法の見直し>を行い、その結果このような対応をするようになった、という新たに獲得した対処方法について語られていた。

この一連の流れは、直接の指導・強化を受けて新たな行動を獲得するというところで、直接学習が行われていたと言えるだろう。

モデルとなる他者の特徴や言動を模倣学習する【モデリング】と、他者から直接的な指導・助言、あるいは強化を受けて学習をする【直接学習】はどちらも所属する集団内の他者の影響を受けてなされるものであり、【社会的学習】という概念に含まれる。

【社会的学習】の起こる条件としては、や

はり異年齢者を含む仲間集団との親密な交流が欠かせないであろう。今回語りにもられた【社会的学習】は、特にプログラム内で起きた出来事というわけではなく、1週間近く生活を共にすることにより、その中で獲得されたものとみられる。児童の心理的発達面から見て、この仲間集団の中で発生する【社会的学習】は、キャンプが提供できる大きな効果のひとつだと考えられる。

(7)【役割取得】カテゴリー

ラベル<先輩の消失><役割の模索><先輩役割の引継ぎ><リーダー役割の請負><年齢ごとのすみわけ><異年齢との交流><他人への洞察><他人への配慮><他人の視点に立っての思考><愛他的思考・行動>から【役割取得】カテゴリーが生成された。

<先輩の消失>では、自分よりも年長のキャンパーが卒業していき、グループをまとめ引っ張る役割を担っていた先輩がいなくなってしまうことが語られていた。

<役割の模索>では、さまざまな年齢の人間がともに生活するキャンプという場で、自分はどのような役割を負えばいいのか、自分にはどのような役割期待があるのか、を模索している様子が語られた。

<先輩役割の引継ぎ>では、かつて先輩が演じていた役割を、先輩がいなくなったキャンプで自分が請け負ったことが語られていた。

<リーダー役割の請負>では、グループの統制、バランスとりなどの、通常はリーダーに期待される役割を、中高ユニットになってからは自分も担っていた、という自負が語られていた。

<年齢ごとのすみわけ>では、異年齢と

の共同生活の中で、すべての行動を一緒にするのではなく、時には距離を置いたりして、それぞれに心地よいバランスをとる、という配慮について語られていた。例えば、小学生から高校生までが同じ広場で野球をしているときに、まだうまく打つ自信のない低学年の子たちは外野で上級生が打つを見て楽しんだり、高校生は自分たちが参加してしまうと小学生との力の差がありすぎてしまうので、まわりで見守るもしくはハンデを負う、というエピソードが語られた。

<異年齢との交流>では、下級生や上級生、リーダーやスタッフとの交流が語られている。

<他人への洞察>では、この子はいま何を感じているのだろうか、この子はどんなことを好むのだろうか、と他者の内面についての洞察が語られていた。

<他人への配慮>では、下級生をフォローするような心配りや、同級生、上級生、リーダーおよびスタッフに対する気遣いや配慮、遠慮などが語られていた。

<他人の視点に立っての思考>では、自分以外の他者の視点からものごとを捉えている様子が語られた。

<愛他的思考・行動>では、自分の欲求を通すことよりも、他者へ配慮し、他者を思いやる内容が語られた。

この【役割取得】カテゴリーは、継続的に参加したキャンパーの特徴的な概念と捉えることができる。<先輩の消失><先輩役割の引継ぎ><リーダー役割の請負>は、同一のキャンプに複数回参加し、グループの中での“先輩”や“リーダー”役割イメージが確立されていなければ発生しえないだろ

う。〈役割の模索〉についても、継続参加者は以前の参加経験からキャンプの流れについての見通しがたち、精神的余裕がうまれるという要因と、キャンプの組織全体が把握できるようになり、その中での役割期待を模索できるようになるという要因が関係していると思われる。

【役割取得】カテゴリーを構成するラベルおよび逐語データの分析から、異年齢集団の中で生活することによって、自然とその集団の中に役割が生じ、成長とともにその役割を意識、模索し、まわりと調整をとりながら演じることができるようになるというひとつのモデルを発見した。また、他人の視点に立った見方ができるようになり、それにより愛他的思考・行動が発生したという仮説も見出された。

このモデルに沿ってキャンプ内で【役割取得】が起こる条件を推測すると、異年齢との交流と、他者の動きと自分の役割期待を模索できるだけの、キャンプ全体への見通しが挙げられるのではないだろうか。【役割取得】は社会化のための重要な発達課題であるが、キャンプ参加は必ずしも継続されるものではない。今回のモデルをひとつの参考としながら、単回参加者の【役割取得】についても探る必要があるだろう。

(8) 【困難への挑戦欲求の充足】カテゴリー

ラベル〈困難な体験〉〈困難への挑戦〉〈困難を乗り越えた充実感・達成感〉から【困難への挑戦欲求の充足】カテゴリーが生成された。

〈困難な体験〉では、山登り等の身体的・精神的に困難な状況に遭遇した状況について語られている。

〈困難への挑戦〉では、困難な状況にな

り厳しい思いを体験したが、再びその困難に挑戦しようと思った、という内容が語られた。

〈困難を乗り越えた充実感・達成感〉では、困難な状況を乗り越えたあとに体感した充実感・達成感について語られた。

困難な体験に遭遇、挑戦した結果、充実感や達成感を獲得し、再び困難へ挑戦しようという意欲が湧いたことが伺える。

今回語られた〈困難な体験〉は、主に身体的負担についてであった。都会の便利な暮らしから離れて自然の中で生活するので、ある程度の不便さや身体的負担はキャンパーにかかる。また、山登りやハイキングなど、キャンプでは身体的負担を、プログラムを通して意図的にキャンパーに与える。この負担の大きさはどのような目的で行われているキャンプであるかによって異なるが、うまくこの困難な状況を乗り越え、充実感や達成感を獲得することができれば、また困難な体験に挑もうとする欲求が生まれていたことが分かった。これは挑戦欲求の発生と、その充足であると解釈できる。

(9) 【創造性の開発】カテゴリー

ラベル〈遊びの創造〉〈新たな楽しみ方の開発〉〈創造的プログラムへの強い関心〉〈プログラムの創造〉〈プログラム創造の魅力〉〈プログラム決定に携わっているという認識〉〈キャンプを創造する意識〉から【創造性の開発】カテゴリーが生成された。

〈遊びの創造〉では、自分たち独自であたらしい遊びを開発したことが語られている。

〈新たな楽しみ方の開発〉では、キャン

プでよく歌われるうたを自分たちでアレンジしたり替え歌にしたりして楽しんでいたり、というような新しい楽しみ方を開発していた様子が語られている。

〈創造的プログラムへの強い関心〉では、グループごとに寸劇や出し物をするプログラムに対する強い関心や、思い出が語られていた。5泊6日の全プログラムの中でも、この自分たちで創造するプログラムが重要な位置を占めていたことが伺える。

〈プログラムの創造〉では、中高生になった自分たちが、プログラムを自分たちで考えて実施した思い出が語られている。

〈プログラム創造の魅力〉では、スタッフやリーダーにあらかじめ決められているプログラムを行うことよりも、自分たちで考えて作り出したプログラムを行うことのほうがより面白く、印象にも強く残っているということが語られていた。

〈プログラム決定に携わっているという認識〉では、中高生になってからは、スタッフやリーダーによってあらかじめ決められたプログラムを行うのではなく、自分たちもプログラム決定に携わり、自分たちでプログラムを選択していた、という思いが語られていた。

〈キャンプを創造する意識〉では、キャンプはスタッフやリーダーによって提供されるものではなく、自分たちで作上げて楽しむものだ、という思いが語られていた。

キャンプ参加者の創造性に関する先行研究として、多田(2005)が挙げられる。多田は、キャンプ初参加者と再参加者(リピーター)の「創造的構え」を、質問紙を利用して比較している。多田によると、参加者の

「創造的構え」は初参加者よりもリピーターのほうが有意に高かったという。2回目以降の参加であれば、どのような流れでキャンプ生活が進むのかという大まかな見通しを立てることができ、精神的余裕が生じる。また、去年と同じことをしてもつまらない、何かもっと新しく面白い体験がしたい、という欲求も生まれるだろう。それによって、自分たちでキャンプの楽しさを創造する、という働きかけが生まれるのではないだろうか。

また、同一のキャンプに毎年参加することで、スタッフとの信頼関係も構築され、自分たちの意見をスタッフに伝え、それを実行に移すことができるようになった。つまり自分たちの発言がキャンプの内容に影響を及ぼすようになったようである。このキャンプに対する自由度、選択肢の広がり、創造性の開発をより促進したと考えられる。

【創造性の開発】カテゴリーを構成するラベルおよび逐語データの分析から、キャンプ参加体験を通して、他者から提供された楽しみを受身的に楽しむ段階を越え、自ら楽しさや興味のあることに創造的に取り組んでいた様子が伺えた。このことにより、キャンプは自分たちで作上げた楽しさを満喫し、満足感を得る機会となっていたと考えられる。

(10)【所属および受容欲求の充足】カテゴリー

ラベル〈友人獲得の場〉〈友人・スタッフへの信頼感、安心感〉〈ありのまま居られる場所〉〈キャンプへの強い愛着〉から【所属および受容欲求の充足】カテゴリーが生成された。

〈友人獲得の場〉では、キャンプ参加によって別の学校や異年齢の友人を獲得できたということが語られていた。

〈友人・スタッフへの信頼感、安心感〉では、自分をありのまま受け入れてくれるという安心感を、キャンプで出会った友人やスタッフに対して抱いていたということが語られていた。

〈ありのまま居られる場所〉では、自分を偽ったり取り繕ったりせずに、ありのまま居ることが出来る場所だったという思いが語られていた。

〈キャンプへの強い愛着〉では、1年間このキャンプを待ちわびていたという思い出や、参加できなかった年があった悔しさなど、キャンプに対する強い思い入れが語られていた。

【所属および受容欲求の充足】カテゴリーを構成するラベルおよび逐語データの分析から、心をゆるせる友人をキャンプという場で獲得することにより、キャンプが自然体で居られる、居心地のよい場として機能していたというひとつのモデルを発見した。

(11)【自然への興味・関心の広がり】カテゴリー

ラベル〈自然体験〉〈自然への興味の芽生え〉から【自然への興味・関心の広がり】カテゴリーが生成された。

〈自然体験〉では、キャンプ中に経験した自然と触れ合う体験について語られていた。

〈自然への興味の芽生え〉では、キャンプで自然に触れた体験をきっかけとして、自然に対しての興味や関心が芽生えたという思いや、キャンプ終了後も自然に対して

の意識の広がりを持続した、ということが語られていた。

キャンプは大抵、山や湖など自然が豊かな場所で実施されるので自然体験自体は抽出されて当然の概念である。その自然体験を受けて、自然への興味や関心が高まり、キャンプ以外の場所でも自然に興味を持つようになる、という一般化が起こっている点が重要である。

【自然への興味・関心の広がり】カテゴリーを構成するラベルおよび逐語データの分析から、都会から離れて自然体験をすることにより、普段はあまり興味を向けなかった自然に対しての興味・関心が増し、それが一般化された、というひとつのモデルを発見した。

3. 本研究の成果

本研究では、継続参加者によって認識されていたキャンプの機能にあたるカテゴリーが、11カテゴリー抽出された。心理的発達の観点からみると、【自己効力感の獲得】【所属及び受容欲求の充足】など、自己の安定に役立つ機能が抽出された。また、【社会的学習】【役割取得】といった児童の社会化のために重要な概念が抽出された。【社会的学習】【役割取得】は、これまでのキャンプに関する先行研究でほとんど触れられていない新出の概念である。参加者への質的調査によりこれらの新しい概念が発見できたことは大きい。

また、各カテゴリーのラベルや逐語データを読むことで、これらの機能や変化がどのように起きるのか、というひとつのモデルを見出すことができた。ひとつのモデルであり、必ずしも一般化できるものとは限らないが、このようにキャンプによって変

化が起こることがある、という1例を提示することで、今後の参考にはなりうるであろう。

本調査で注目した継続参加する意味については、【責任感・自立心の芽生え】【社会的学習】【役割取得】【創造性の開発】カテゴリーに、継続参加である影響がみられたと考える。同じキャンプに毎年参加することで、先輩や後輩の様子を見ながら関係性を作り上げ、自身の社会化も促進されていたようである。また、同じ流れでキャンプが進行することも、継続参加者からみると決して退屈なことではなく、むしろ見通しが立った上で楽しさを存分に追求できたようである。

本論文の冒頭でとり上げた第19回日本学術会議報告書「子どものこころを考慮の一わが国の健全な発展のために―」(子どものこころ特別委員会)の中で、現代社会でのコミュニティの弱まり、少子化、核家族化の影響により、子どもたちが体験から学習する機会が減ってしまっている、と述べられている。本研究から抽出されたカテゴリーは、子どもたちがキャンプという集団生活を体験することにより、【社会的学習】をはじめとする、子どもの発達と社会化に重要な変化を呈していた可能性を示している。

4. 本研究の限界と今後の展望

以下に、反省(reflection)を挙げ、今後の研究課題につなげたい。

- 研究者自身がキャンプリーダー経験者であったことから、質的研究の分析を行ううえで、自らの望む方向へと結果を歪曲させてしまう可能性があった。そのため、質的研究ではあるが、逐語を量的

研究のデータのように機械的に扱い、文脈に流される心配が極力少ないと思われたグラウンデッドセオリー・アプローチのStrauss法を採用した。しかし分析者の思考を分析の道具のひとつとして利用する質的研究においては、やはり分析者のバイアスを完全に排除することは難しかったと考えるのが妥当だろう。

- 本研究で抽出された概念は、あくまで『Xキャンプ』の元参加者から抽出された概念であり、そのほかの組織キャンプにもこの結果が適応できる、という性質のものではない。ひとつの概念モデルという立場であることに注意する必要があるだろう。
 - 本研究の研究参加者は、『Xキャンプ』に多数回参加し、『Xキャンプ』に関するインタビューの申し出を受けてくれた人物である、という点から、必ずしも標準的なキャンプ参加者とはいえない。むしろ、キャンプに対する思い入れの強い、限られた参加者である可能性がある。そのため、キャンプの効果・役割を今回の研究参加者と同じように他のキャンパーはうけとっていない可能性も十分考えられる。
- 以上の本研究に関する反省を踏まえ、今後の課題と展望について、以下のように提案する。
- キャンプ関係者が調査・分析を行う場合、自己満足、ひとりよがりの研究になってしまいうリスクが大きい。そのため、キャンプに対する先入観の少ない、第三者の手によって研究が行われると、より興味深い結果が得られるのではないか。

- ・ キャンプと一言で表しても、キャンプごとに目的は三者三様であり、その心理的影響をひとつの概念でまとめることは難しいと思われる。そのため、複数のキャンプにて探索的研究を行い、その共通項や差異を確認することも重要であろう。
- ・ 今回の研究では、研究参加者選定方法によって、結果に強いバイアスがかかったと言わざるをえない。よって、今後の研究では、キャンプを1度参加しその後継続参加はしなかったキャンパーなどに対しても、キャンプに参加しての印象等を調査する、ということを視野に入れるべきであろう。

今回の調査、分析だけでは『Xキャンプ』に参加していた4名の元キャンパーにとって、このような効果があった、と述べるにとどまる。しかし、この仮説を元に、より広く、学術的に、キャンプが参加する子どもたちに与え得る効果や影響、リスク等を調査し、正確に広報することができるようになれば、キャンプは子どもに対する有効なソーシャル・サポートのひとつとなり得るであろう。

その際、キャンプを主催する側としては、自分たちのキャンプはどのような目的・趣旨で行うのかを明確に提示することが重要であると考え。参加者がそれぞれのニーズにあったキャンプを選び、ソーシャル・リソースのひとつとして活用されることが望ましいだろう。

また、これまでの研究ではキャンプのプログラムが参加者にどのような影響を与えるのかを検討するものが多く見受けられる。しかし本研究の逐語データを読み解く

限り、参加者の変化や、参加者にとって印象深い出来事は、プログラム場面よりもむしろ生活場面でのなにげない瞬間に起きているようである。この結果から考えると、ソーシャル・サポートとして良質のキャンプを子どもたちに提供するには、プログラム面での派手さを求めたり、プログラムの難易度を追及したりすることよりも、参加する子どもたちの発達段階や過程を十分理解し、彼らの能力に合わせたほどよいプログラムを提供し、成長を促す働きかけをできるような専門家の育成に力を注ぐべきであろう。

今後さらに、各キャンプの果たす機能の違いや、参加者の特質による効果の差を検討することで、キャンプが子どもたちに提供される、よりよいソーシャル・サポートのひとつとなることを期待したい。

文献

- 蓬田高正・飯田稔・井村仁(2003). 長期自然体験が児童の内発的動機づけに及ぼす影響 筑波大学体育科学系紀要, **26**, 103-106.
- 平田裕一・叶俊文(2001). 冒険的野外活動プログラムが児童・生徒の心理的側面に及ぼす効果について—青年の家主催事業における2年間のデータからの検討— 中京女子大学研究紀要, **35**, 89-99.
- 飯田稔・井村仁・影山義光(1988). 冒険キャンプ参加児童の不安と自己概念の変容 筑波大学体育科学系紀要, **11**, 79-86.
- 倉本満枝(1981). キャンプ集団における児童のリーダーシップ行動の変容 実験

- 社会心理学研究, **20**(2), 127-136.
- 松永太郎・飯田稔・井村仁・関智子・落合良行(1999). キャンプ実習体験が女子高校生の友だちづきあいに及ぼす影響 野外教育研究, **2**(2), 21-28.
- 森井利夫／編集(1995). 現代のエスプリ「キャンプ」 至文堂
- 中村正雄(1997). キャンプの評価に関する研究—参加者が意識するキャンプの効果を中心として— 東横学園女子短期大学紀要, **32**, 71-76.
- 日本学術会議(子どものこころ特別委員会)(2005). 第19回日本学術会議報告書「子どものこころを考える—わが国の健全な発展のために—」.
- 西田順一・橋本公雄・徳永幹雄・柳敏晴(2003). 組織キャンプ体験が児童のメンタルヘルスに及ぼす効果—とくに自己決定感を中心として— スポーツ心理学研究, **30**(1), 20-32.
- 奥山洸・諫山邦子・加藤敏之(2001). 合同キャンプにおける自己概念の変化 環境教育研究 **4**, 11-18.
- 関根章文・飯田稔(1996). キャンプ経験が児童の自己概念と一般性自己効力に及ぼす影響 筑波大学体育科学系紀要, **19**, 85-89.
- 多田聡(2005). 冒険キャンプにおけるリーダーの心理的特性 国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要, **5**, 35-44.
- 橋直隆・川村協平・星野敏男(1984). キャンパー側の視点によるキャンプ効果の因子分析研究 中京女子大学紀要, **18**, 171-177.
- 渡邊仁・飯田稔(2005). キャンプ経験によ

- る女子高校生の自己概念の変容過程 野外教育研究, **9**(1), 55-66.
- 山本多喜司／監修(1991). 発達心理学用語辞典 北大路書房.

表1 生成されたカテゴリー

カテゴリー名		ラベル名
自己効力感の獲得		上級生になった喜び・効力感 一人前として認められた体験 成長の自覚
責任感・自立心の芽生え		責任感の芽生え 自立心の芽生え
集団活動への適応		慣れない共同生活 仲間との同調 共同体験のよろこび 協調性の強まり
内発的動機付けの発生		好奇心の広がり 自発的・積極的なプログラム参加 新たな体験への欲求 積極性の一般化
最終的に採用されたカテゴリー		新たな出会い 模索
社会的学習	モデリング	年長者への興味 年長者への尊敬 年長者の観察 年長者への同一視
	直接学習	被叱責体験 これまでの対処方法 年長者からの助言 これまでの対処方法の見直し 新たな対処方法の獲得
役割取得		先輩の消失 役割の模索 先輩役割の引継ぎ リーダー役割の請負 年齢ごとのすみわけ 異年齢との交流 他人への洞察 他人への配慮 他人の視点に立っての思考 愛他的思考・行動
困難への挑戦欲求の充足		困難な体験 困難への挑戦 困難を乗り越えた充実感
創造性の開発		遊びの創造 新たな楽しみ方の開発 創造的プログラムへの強い関心 プログラムの創造 プログラム創造の魅力 プログラム決定に携わっているという認識 キャンプを創造する意識
所属及び受容欲求の充足		友人獲得の場 友人・スタッフへの信頼感、安心感 ありのまま居られる場所 キャンプへの強い愛着
自然への興味・関心の広がり		自然体験 自然への興味の芽生え

表2 各カテゴリー概要

心理的発達に果たした機能・役割		カテゴリーの内容
自己効力感の獲得		異年齢集団の中でも1人の人間として平等に対応された経験により、自分は一人前だ、という自己効力感を獲得する機会となった。
責任感・自立心の芽生え		キャンプでのグループ活動体験を通じ、自分がグループをまとめるという責任感や、リーダーに頼らない自立心が養われた。
集団活動への適応		日常とは異なる集団生活を送ることにより、仲間と一緒に過ごす楽しみ、一緒に何かにとりくむ喜びを知るきっかけとなった。その結果、協調性が強まり、集団活動への適応が促進された。
内発的動機付けの発生		日常生活では体験しないような目新しい出来事を経験し、より面白い体験をしてみたい、より楽しさを追求したいという意欲、内発的動機付けが高まった。それにより、さまざまな活動に対する積極性が促進された。
試行錯誤の場		学校生活の中ではあまり頻繁に体験しない新規の出会いを、キャンプでは毎年経験することになる。その出会いの場面で相手のことを探り、接し方や関係性の築き方を模索していた。すなわち、新規の人間関係構築のトレーニングの場として機能していた。
社会的学習	モデリング	普段あまり接する機会のない異年齢、特に年長者と生活をともにすることにより、年長者に興味を持ち、憧れ、「自分もあになりたい」と相手の言動を取り込むモデリングが起きていた。
	直接学習	5泊6日という長い時間をともに過ごすなかで、叱責やアドバイスを受ける場面も生じる。それにより、自己の言動を振り返り、見直し、新たな対処方法を身につける機会となっていた。
役割取得		異年齢集団の中で生活することによって、自然とその集団の中に役割が生じる。その役割を成長とともに感じ取り、模索し、まわりと調整をとりながら演じることができるようになる。
困難への挑戦欲求の充足		ストレス場面でもある困難な体験にあえて挑戦し、それを乗り越えた充実感を得、その充実感からまた困難な体験に挑もうとする欲求が生まれていた。挑戦欲求の発生と充足がみられた。
創造性の開発		他者から提供された楽しみを受身的に楽しむ段階を越え、自ら楽しさや興味のあることに創造的に取り組み、自分たちで作上げた楽しさを満喫することに満足感を得る機会を果たしていた。
所属及び受容欲求の充足		心をゆるせる友人をキャンプという場で獲得することにより、キャンプが自然体で居られる、居心地のよい場として機能していた。
自然への興味・関心の広がり		都会から離れて自然体験をすることにより、普段はあまり興味を向けなかった自然に対する興味・関心を増す機会となっていた。